

礼文の森から

宗谷森林管理署
礼文森林事務所



レブンアツモリソウの研究報告



礼文島にしか自生していないレブンアツモリソウは、島民の皆様の財産です。

過去に盗掘されるなど、その数は徐々に減ってきています。このような状況が長く続くと、絶滅につながってしまうかもしれません。そうならないようにレブンアツモリソウの生態を調べ、ひいては増殖方法を見つけるために研究をしてきている方達があります。その中から分かってきたことを紹介していきたいと思います。

今回からは、熊本大学大学院の准教授 杉浦 直人先生による研究で、レブンアツモリソウの授粉のお話です。



花を半分に切ったもの



花を上から見たもの

授粉とは、めしべにおしべの花粉がつくことです。授粉して種ができ、子孫を残すことができます。

レブンアツモリソウは、虫によって花粉を運んでもらう花＝虫媒花（ちゅうばいか）で、虫が来ないことには受粉ができません。

その主な授粉昆虫は、**ニセハイイロマルハナバチ**の女王バチで、花粉がハチの背中について運ばれます。



ニセハイイロマルハナバチ

ニセハイイロマルハナバチは、中央の穴から花の中に入り、付け根にある穴の一方から抜け出します。

その最中に、めしべとおしべに接触します。

レブンアツモリソウが子孫を残すには、マルハナバチの手助けが必要です。このことから、**レブンアツモリソウを守るだけでは不十分であり、他のいきものとの「つながり」を守っていくことが大切です。**

(資料提供 熊本大学大学院准教授 杉浦 直人 氏)



宮本誠一郎さん撮影